

マイノリティの告発をマジョリティはどう受け止めるか

—短文投稿 SNS での告発とそのリプライから—

加藤林太郎(神田外語大学) 山元一晃(金城学院大学)

1. 研究の背景と目的

2023年8月、大阪で行われた音楽フェスティバルに出演した韓国人DJが、講演中に客から性加害を受けたとTwitter(当時)で告発した。それに対し、被害者となったDJへの差別・抑圧の言説が多数確認された。リプライの中にはDJへの慰めや加害者への怒りなどもあったが、それらは対抗言説として有効に機能していたとは言い難い。この事件については後にフェスティバルの主催者が刑事告発をし、結果的に3名の男女が警察に出頭している。3名は書類送検されたものの、DJ側に処罰感情がないことなどを理由に不起訴処分となっている。

この経緯だけを見れば、DJのTwitter上での告発は加害者を警察に出頭させることに繋がるものだったと言える。しかし当然ながら、そのことをもって被害者が上げた声に対して二次加害が起こったことを正当化することはできない。そのリスクが告発に織り込まれているなら、それはすなわちそこに存在する権力勾配を強固にし、被害者が声を上げられなくなっていくことに繋がるからである。被害者の声が社会に届くためには、加害者・抑圧者が自らの持つ特権をunlearnすることが不可欠だと言える。

本研究ではこのような問題意識に立脚し、一連のツイートとリプライを分析することで、その相互行為の様相を記述する。それにより、マイノリティの告発がマジョリティにどのように受け止められるのか、その構造上の問題点を示すことを目指す。

2. 分析の枠組み

本研究では、批判的談話研究(CDS)(名嶋, 2018)の視座から、特権の所在に基づくマジョリティとマイノリティの概念(出口, 2021)を適用し、かつ成員カテゴリーの概念(Sacks, 1972)を援用することで分析する。以下にそれぞれの本研究における位置づけについて述べる。

2.1 批判的談話研究 (CDS)

CDSとは、「談話研究の一手法や方法論でなく、研究に対する姿勢」(名嶋, 2018)であるとされ、「何かに支配されている弱者側に立ち、支配しようとする人々(権力)の言説をさまざまな観点から分析し、そこに自然を装って隠されている権力の意図と実践とを可視化して明るみに出す」(名嶋, 2018)ことを通し、社会の変革を目指すことを目標としている。この権力関係を本研究のケースに当てはめると、被害者となったDJが被支配者であり、二次加害となるリプライを送った人々が支配者であると定義できる。したがって本研究で目指すところは、被害者であるDJの側から、その告発を支配者である人々がどのように受け止め、その上で加害を行っているのかを可視化することである。だが、後に詳述するようにこのケースにおいてDJは単なる被害者ではなく、多様な属性の交差性の中で弱者として位置づけられている。それを記述するために用いるのが、マジョリティとマイノリティの概念である。

2.2 マジョリティとマイノリティ

出口(2021)は、相互行為において参加者がその特性によって労せずして得ている優位性を「特権」と呼び、それを有する側をマジョリティ、有さない側をマイノリティとして定義づけている。そして特性は多様であり、交差性(Crenshaw, 1989)の中で参加者はマジョリティ、あるいはマイノリティとして位置づけられる。本研究ではDJの告発を分析することにより、DJと加害者がどのように交差性の中で位置づけられているのかを記述することで、その権力勾配の在り方を明らかにする。

2.3 成員カテゴリー

前項で述べた交差性の中での参加者の位置づけを考察する際に手掛かりとするのが、成員カテゴリー(Sacks, 1972)である。この概念はエスノメソドロジー、会話分析の中で生まれた、参加者が何者として相互行為に参加しているのかの捉え方

のことである。明示的、あるいは暗示的に参加者が自身と他者をどのように位置づけているかを考察することで、前項で述べた交差性の中での特権の在り方を検討する。

3. データの詳細

3.1 DJのツイート

性被害があった音楽フェスティバルは2023年8月11日から13日にかけて行われ、DJの出演は最終日の13日だった。日付が変わった8月14日の3:07と3:09の一連のツイートでDJは韓国語で性被害を報告する。そして11:27から11:28にかけて、DJは同内容を3回に分けて日本語でツイートをしている。今回分析の対象とするのは、この告発を行った一連のツイートのうち、日本語によるツイート群である。以下に改行や句読点を含め原文のまま引用する。

【表1】DJによる性被害の告発ツイート

1	11:27	日本の大阪ミュージックサーカスフェスティバルで公演を終えましたがその時に凄く悲しい出来事がありました。 ファンの方々ともっと近くで楽しんでもらうために、 私が公演の最後の部分でいつものようにファンの方々に近づいた時、 数人が突然私の胸を触ってくるというセクハラを受けました。
2	11:27	あまりにも大きな衝撃を受けて未だに怖くて手が震えています… その時、とても驚いて怖かったですが、 一方で私を見て泣いて喜んでくれて好きと伝えてくれる素敵なファンの方々もいて、一旦最後までやりきろうと最大限平気なふりを頑張りました。 今はホテルに戻ってきましたが、 未だにとっても怖です
3	11:28	DJをしてから10年立ちますが公演中にこんなことをされたことは人生で初めてです。 こんなことをされたことにとっても戸惑って信じられないし、 もう舞台の下や前の方に行ってファンの皆さんに近寄りがたいと思っています…

なお、韓国語での最初のツイートは2023年12月24日時点で210リプライを得ているが、日本語では786リプライと、反響に大きな差がある。加えて、前者のリプライは大半が韓国語によるものであるのに対し、後者は日本語によるものがほとんどである。この差も考慮しながら分析を進める。

3.2 リプライ

上記の3つのツイートについてのリプライのうち、翌8月15日にDJが反論を行うまでのリプライを、フリーソフト¹を用いて8月31日までに収集した。この間に投稿者が削除したり、アカウントが規制されたりして収集できなかったものもあることが予想されるが、それでもなお抑圧・差別の言説が多数取得されたことから、分析には支障がないと判断した。なお、本研究においてはDJの最初のツイートに直接向けられた24時間以内のリプライ369件を対象とする。

4. 分析・考察

4.1 成員カテゴリー化

DJのツイートは、一度韓国語で行われたものを、再度日本語で行ったものであった。このことから、このツイートが明確に日本語話者をアドレスしていることが分かる。そしてそれを受ける側からのリプライがほぼ日本語で行われていることから、ここで参加者間の【日本語非母語話者-日本語母語話者】カテゴリー対が前景化されている。また、DJは国籍についての言及は行っていないが、告発の冒頭で「日本の大阪」という言及が行われていること、また、リプライ内に64件「日本人」という語が出現していることから考えると、母語に関するカテゴリーと共起されて【外国人-日本人】カテゴリー対が適用されていると推測される。また、告発においては「胸を触る」という行為が性加害として位置づけられており、DJは自身を女性として位置づけている。実際には女性もDJの身体に触れたとして書類送検されているのだが、リプライの中には男性の加害性への言及が見られることから、局所的な【女性-男性】カテゴリー対の適用も観察される。これらのことから、DJの告発は自身を少なくとも日本語非母語話者・外国人という交差性を持つマイノリティとして提示するものであり、リプライからはその発信者の大半が自身をDJの対極にある日本語母語話者・日本人としてマジョリティに位置づけていることが

¹ 使用したのは「ついすぽ」(<https://tilda.afonomics.com/TweetExport/>)というGoogle Chromeの拡張機能である。(アクセス:2013年12月25日)

分かる。ここで重要なことは、被害者側にマイノリティ性が、加害者側にマジョリティ性が適用されていることである。これによりこの性被害が権力勾配を背景にした差別・抑圧の事案として位置づけられる。その意味では【女性-男性】カテゴリー対もこの位置づけに寄与するものとして捉えることもできよう。

では、そのようにして位置づけられた成員カテゴリーとしてのマジョリティ性、マイノリティ性は、どのような行為の資源となっているのだろうか。次項では【外国人-日本人】カテゴリー対に注目し、実際のリプライを基に記述する。

4.2 謝罪の資源としての成員カテゴリー

リプライの中には、立場を表す「として」を自身の特性と共に起させたものが全体の約10%にあたる36件見られた。その中で「日本人」やそれに繋がる情報を共起させて明示的に謝罪を表明するツイートは25件観察された。以下に、リプライ数、リツイート数、引用リツイート数、「いいね」数を合計した値が多い5つのリプライを代表例として示す。

【表2】「日本人」として被害者に謝罪を行うリプライの例

1	大阪でこんな思いされたこと同じ大阪人、日本人として許されへんしホンマに申し訳ない🙏🙏しっかりとした対応と処置されること願ってますし、辛いことと思います今はゆっくり休んでください
2	同じ国籍を持つものとして、陳謝いたします。日本のことを嫌いになるかと存じますが、どうか、Sodaさんにもう一度、好きになってもらえるように、頑張って発信していきます。
3	大阪に住んでる一人としても、日本人としても恥ずかしい限りです。謝っても許されることはありません。でも、謝らしてください。あなたの一ファンとして。申し訳ございません。これまた、勇気がいるとは思いますが、証拠写真を弁護士と相談の上、相応の対処をすべきだと思います。
4	本当に悲しく、残念な思いです。同じ日本人として申し訳無く思います。ごめんなさい。
5	日本人として申し訳なく思います。ご免なさい。恥ずかしいです。犯人は日本人の恥。許せない🙏

ここでリプライの送り手は、自らの「日本人」カテゴリーを前景化させ、加害集団の側から謝罪を代行することを可能にしている。しかし、これは「外国人」であるDJに謝罪をするという構造を作り、加害者と被害者の間にある権力勾配を再生産することにも繋がっている。また、自らの特性を明示せず「日本での公演中ということで、申し訳なく思います」のように謝罪を行っているケースもあるが、これも謝罪の動機は「日本での公演中」の出来事であったことにあり、それに対する謝罪は即ち自身をマジョリティに位置づけなければ行えない。即ち、マジョリティ性を「として」を用いて明示するかどうかに関わらず、謝罪を行うためには自身を加害集団であるマジョリティカテゴリーに位置づける必要があると言えよう。その意味で、謝罪という行為そのものが構造的差別を存置、再生産する危険性がある行為と捉えることができる。

4.3 非難の資源としての成員カテゴリー

マジョリティ性を資源とする行為には、加害者や日本社会への非難が謝罪と重なりを持って観察された。前項同様「として」が「日本人」と共起し、「恥ずかしい」などの言葉で非難を行ったケースは31件あった。下記に前項同様その例を示す。なお、重複する事例は、謝罪と非難の両方を行っているツイートである。

【表3】「日本人」として加害者や日本社会に対し非難を行うリプライの例

1	大阪でこんな思いされたこと同じ大阪人、日本人として許されへんしホンマに申し訳ない🙏🙏しっかりとした対応と処置されること願ってますし、辛いことと思います今はゆっくり休んでください
2	はじめまして。大変傷ついたと思います。私もこのツイートを見て心を痛めています。犯行現場を撮影されていたようなので、犯人特定をしてほしいと思いました。あなたは悪くないです。日本人の私としては恥ずかしい話ですが、日本は性加害に寛容的な国だという印象がつきつつある危機感があります。
3	大阪に住んでる一人としても、日本人としても恥ずかしい限りです。謝っても許されることはありません。でも、謝らしてください。あなたの一ファンとして。申し訳ございません。これまた、勇気がいるとは思いますが、証拠写真を弁護士と相談の上、相応の対処をすべきだと思います。
4	日本人として申し訳なく思います。ご免なさい。恥ずかしいです。犯人は日本人の恥。許せない🙏
5	これはあかん。同じ大阪人、関西人としてはずかしい。犯罪やでなあ。写真を証拠として警察に被害届け出してください。

マイノリティの側からマジョリティを非難することは困難であり、このようにマジョリティが自身の属する集団やその成員を非難することは、特権のunlearnという点から見ても有用な行為と評価されよう。だが、この非難という行為にも構造的差別に繋がる危険性がある。ここでの非難において、書き手は自身と加害者を「同じ大阪人、日本人」と位置づけ、その上で「犯人は日本人の恥」であるとし、「警察に被害届け」を出すなどの「相応の対処」を望んでいる。この際、日本人の恥であり、処分されるのはあくまで加害者であり、その咎が自身に及ぶという言説は形成されていない。つまり、自身を加害者と同族集団に位置づけてはいるものの、その内部においては【いい日本人-悪い日本人】という二項対立型のカテゴリー対が形成され、加害者を例外化・他者化することで非難を行っていることが分かる。これにより「日本人」は本来的には善

良な人々として位置づけられることになる。マジョリティ性を持つ集団の成員がこれを提示することは、同族集団やその成員に対する非難であると同時に、そのカテゴリーに属さないマイノリティに対するマイクロアグレッション²として作用する危険性が指摘できるのではないだろうか。

4.4 排斥の資源としての成員カテゴリー

ここまで謝罪・非難といった、被害者の側に対する配慮を伴う行為が、構造的差別を存置・再生産する可能性を検討してきた。最後に、これらの行為が排斥と結びつく例を挙げる。

【表4】排斥と結びつく言説を含むリプライの例

1	怖いですね、もう大阪にも日本にも来ない方がいいです！
2	日本はこういう国です。もう来ない方がいいですよ。
3	もう日本に来ないでいいと思う。こんな事をされてもまともに動く警察もいないし…来るだけ損よ
4	日本は危ないからもう来ない方がいいと思います。
5	最悪ですね…こんな事する人がいるなら日本には来ないほうがいいですよ ⁽³⁾

ここで書き手は「来ない方がいい」「来ないでいい」という表現で自分が被害者を迎え入れる側であることを示し、【外国人-日本人】カテゴリー対を前景化している。そして、「日本はこういう国です」「日本は危ない」「怖い」「こんな事する人がいる」という非難をマジョリティの側から行うことで、マイノリティである被害者に「もう来ない方がいい」と助言・推奨をしている。これは一見被害者の身を案じているようにも見えるが、前項までに考察したように、ここでの非難はマイクロアグレッションとしても記述可能な行為であった。それが今後の来日押し止める表現と共起することで、ここでの助言・推奨という行為が排外的言説としての機能を有していることを明らかにしている。

5. まとめ

本研究では、マイノリティの告発によって適用された成員カテゴリーがマジョリティである受け手によって絡めとられ、マジョリティが意識しているかどうかに関わらず、告発を受けての謝罪や非難といった行為が構造的差別の存置・再生産に繋がることを示した。また、それらが排外的言説にも繋がる危険性を考察することで、マイノリティが声を上げることには多大なリスクが伴うことが改めて可視化された。このことは、性加害のみならずあらゆる権力勾配を背景とした加害において、被害者側にその告発や立証の責任を負わせることの根本的な危険性を示すものである。このようにマイノリティに位置づけられた側が恒常的にリスクにさらされている以上、マジョリティ側の責任と、その変容を問うことがより重要であると言える。今後はこのような構造的差別を横断的に分析するとともに、マジョリティ側に求められる変容を実効性を伴う形で提示できるよう、さらに考察を進める。

参考文献

- Crenshaw, K. (2013). Demarginalizing the intersection of race and sex: A black feminist critique of antidiscrimination doctrine, feminist theory and antiracist politics. In *Feminist legal theories* Routledge. pp. 23-51.
- 出口真紀子 (2021). 特権の概念 坂本光代(編) 多様性を再考する マジョリティに向けた多文化教育 上智大学出版 pp. 73-89.
- デラルド・ウィン・スー (2020). 日常に埋め込まれたマイクロアグレッション 人種, ジェンダー, 性的指向: マイノリティに向けられる無意識の差別 明石書店
- 名嶋義直 (2018). 批判的談話研究をはじめ ひとつじ書房
- Sacks, H. (1972). An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In Sudnow, D. (Eds) *Studies in social interaction*. Free Press. pp.31-74. (北澤裕・西阪仰訳(1989) 会話データ分析の利用法—会話分析事始め 北澤裕・西阪仰(編・訳) 日常性の解剖学—知と会話 マルジュ社 pp. 93-174.)

² マイクロアグレッションは、スー(2020)により「ありふれた日常の中にある、ちょっとした言葉や行動や状況であり、意図の有無にかかわらず、特定の人や集団を標的とし、人種、ジェンダー、性的指向、宗教を軽視したり侮辱したりするような、敵意ある否定的な表現のこと」と定義されている。